

極東域モンスーンに関する国際研究集会の報告*

中 村 晃 三**

1985年11月、東京大学海洋研究所で、「極東域モンスーンに関する国際研究集会」が開かれた。本研究集会は日本学術振興会と中国科学院大気物理研究所の援助を得て組織委員会(委員長 浅井富雄, 事務局 中村晃三)と東大海洋研究所の共催として、日本気象学会の後援のもとに行われたものである。

研究発表は11月5日から8日までで、5日の夕方には懇親会、7日の午後は気象衛星センターの見学会が行われた。参加人員は、在米日本人2名、中国からの参加者6名を含め、連日、50名ぐらいであった。

発表論文は45編で、その内訳は、

1. 夏季モンスーン (大規模場) 12編
2. 夏季モンスーン (小規模場) 10編
3. 冬季モンスーン 7編
4. モンスーンの季節変化 7編
5. モンスーンの経年変化 9編

である。(講演題目は別記参照)

発表時間は、ひとりについて、討論を含めて25分(講演20分・討論5分)であったが、予定時間を過ぎることがしばしばあった。東アジアのモンスーンという限られたテーマであったが、コーヒー・ブレイクや昼食の時間にも、英語、日本語、中国語の混じりあった多くの議論が行われていた。

最近話題の30~40日周期の擾乱とモンスーンの開始との関係の問題や、エル・ニーニョなど経年変化の問題に関連した発表では、同じような問題を扱っている研究者が多いせいか、特に質問やコメントが多かった。

本会議の開催については文部省科学研究費補助金、鹿島財団などの援助をいただいたことを記して謝意を表する。

なお、本会議の Proceedings は、本年度中には発行される予定である。会議の参加者には配られるが、その他でご希望の方は、組織委員会(東京大学海洋研究所浅井宛)まで申し込んでほしい。

* Report of the International Conference on Monsoon in the Far East.

** Kozo Nakamura, 東京大学海洋研究所.

【プログラム】

セッション 1: 夏季モンスーン (大規模場 その1)

座長: 松野太郎 (東京大学・地球物理学教室)

- 1.1 東アジアにおける夏季モンスーン
Tao, Shiyan, L.-X. Chen, (中国科学院・大気物理研究所)
- 1.2 東アジアの平均的な夏季モンスーン循環の生成および維持に対するチベット高原の熱的影響
Huang, Ronghui (中国科学院・大気物理研究所)
- 1.3 最近のチベット高原気象学
Gao, You-xi (中国科学院・蘭州高原大気物理研究所)
- 1.4 全球的な東西循環とアジア・モンスーンの変動
安成哲三 (筑波大学・地球科学系)
- 1.5 北西太平洋夏季亜熱帯と冬季南半球の間でのジオ・ポテンシャル場のテレ・コネクション
青木 孝, 河原幹雄, 山田真吾 (気象庁)
- 1.6 1984年夏の東アジア東部の解析
栗原弘一, 河原幹雄 (気象庁)

セッション 2: 夏季モンスーン (大規模場 その2)

座長: Tao, Shiyan (中国科学院・大気物理研究所)

- 2.1 夏季モンスーントラフ (リッジ) の作用および南アジアの熱帯低気圧とムービング・シスク・モード
Li, Chongyin (中国科学院・大気物理研究所)
- 2.2 1979年の外向長波放射の季節内変動
中沢哲夫 (気象庁・気象研究所)
- 2.3 アジア夏季モンスーンの季節内変動に伴う短周期変動の振幅変調
山崎信雄, 村上勝人 (気象庁・気象研究所)
- 2.4 モンスーン期間中の GMS からみた雲量変化
加藤政勝 (気象庁)
- 2.5 1979年の中国大陸上の梅雨前線帯の季節内変動
加藤内蔵進 (鹿児島地方気象台)

- 2.6 中国大陸上の梅雨前線帯の構造の突然の変化とそれに関連したモンゴルから中国平野北部での気団変質

加藤内蔵進 (鹿児島地方気象台)

セッション 3: 夏季モンスーン (小規模場 その1)

座長: 二宮洸三 (気象庁)

- 3.1 梅雨前線と梅雨前線上擾乱の特徴
二宮洸三 (気象庁)
- 3.2 梅雨前線の大規模な力学に関する数値予報実験
中村 一 (気象庁)
- 3.3 梅雨前線における中規模の特徴
秋山孝子 (気象庁・気象研究所)
- 3.4 中国における豪雨の特徴
Tao, Shiyan (中国科学院・大気物理研究所)
- 3.5 1982年7月23日北部九州での梅雨前線上の豪雨の事例解析: 長崎豪雨
小倉義光 (イリノイ大学), 浅井冨雄, 土肥啓介 (東京大学・海洋研究所)
- 3.6 梅雨期の豪雨に及ぼす地形効果の事例解析
渡部浩章 (広島地方気象台), 小倉義光 (イリノイ大学)
- 3.7 中国北西部の渦とロッキー山脈風下低気圧の場合の総観場の比較
小倉義光, S. Zhao, S.-T. Soong (イリノイ大学)

セッション 4: 夏季モンスーン (小規模場 その2)

座長: 菊地勝弘 (北海道大学・地球物理学教室)

- 4.1 低気圧周辺の雲クラスターの構造とふるまいに関する事例解析
赤枝健治, 武田喬男 (名古屋大学・水圏科学研究所)
- 4.2 豪雨の数値シミュレーションと東アジアモンスーン域の予報モデル
Zhou, Xiaoping (中国科学院・大気物理研究所)
- 4.3 高解像度プリミティブモデルによる梅雨期の非常に強い豪雨の予報実験
栗原和夫, 上野 充, 三浦信男 (気象庁)

セッション 5: 冬季モンスーン (その1)

座長: 小倉義光 (イリノイ大学)

- 5.1 石狩湾で観測した冬季季節風下の雪雲のレーダーエコー気候学

菊地勝弘, 遊馬芳雄 (北海道大学・地球物理学教室), 中平 浩 (北海道大学大学院・環境科学研究科)

- 5.2 冬季季節風下の雪雲の積丹半島の周辺でのふるまい

菊地勝弘, 谷口 恭 (北海道大学・地球物理学教室), 東根 聡 (北海道大学大学院・環境科学研究科)

- 5.3 暖かい海上での気団変質過程の数値モデリング
中村晃三, 浅井冨雄 (東京大学・海洋研究所)

- 5.4 冬季日本海の収束雲帯の形成
永田 雅, 猪川元興, 吉住禎夫 (気象庁・気象研究所), 吉田泰治 (気象衛星センター)

セッション 6: 冬季モンスーン (その2)

座長: 村上多喜雄 (ハワイ大学)

- 6.1 1978-1979年冬季の南東アジア周辺の深い対流雲の空間・時間変動
村上勝人 (気象庁・気象研究所)
- 6.2 冬季モンスーンのチベット高原付近の寒気吹き出しの研究
住 明正 (東京大学・地球物理学教室)
- 6.3 格子間隔以下の地形の変動の北半球冬季循環に及ぼす効果
住 明正 (東京大学・地球物理学教室), 佐藤基和 (気象庁)

セッション 7: モンスーンの季節変化 (その1)

座長: 村上多喜雄 (ハワイ大学)

- 7.1 地球放射収支の海陸による差異について
久保田 効 (気象庁・気象衛星センター), 今井博子 (気象庁・気象研究所)
- 7.2 熱帯の熱源と降水の季節進行
増田耕一 (東京大学・地球物理学教室), 篠田雅人, 江口 卓, 松本 淳 (東京大学・地理学教室)
- 7.3 季節サイクル, 短周波振動, 非定常擾乱の間の関係
村上多喜雄 (ハワイ大学), L.-X. Chen (コロラド大学), A., Xie (ハワイ大学)
- 7.4 外向長波放射から得られた30-60日周期変動の東向き伝播
村上多喜雄 (ハワイ大学), L.-X. Chen (コロラド大学)

ド大学), A., Xie (ハワイ大学)

セッション 8: モンスーンの季節変化 (その2)

座長: 住 明正 (東京大学・地球物理学教室)

- 8.1 GMS からみた東アジアと西部北太平洋での雲分布
浅井富雄, 児玉安正 (東京大学・海洋研究所)
- 8.2 日本周辺の雲クラスターの特徴
武田喬男, 岩崎博之, 赤枝健治 (名古屋大学・水圏科学研究所)
- 8.3 MRI GCM-I でシミュレートされた10年間の冬から夏への季節変化
山崎孝治, 時岡達志 (気象庁・気象研究所)

セッション 9: モンスーンの経年変化 (その1)

座長: 新田 勳 (気象庁・気象研究所)

- 9.1 熱帯大規模場の観測的研究
Sanga, N.K., 山元龍三郎, 岩嶋樹也 (京都大学・気候変動研究施設)
- 9.2 東アジアにおける夏季モンスーンの経年変化とその熱帯アジアモンスーンとの関係
田中 実 (気象庁)

- 9.3 東アジアのモンスーンと北部太平洋の海面水温の経年変化

吉野正敏 (筑波大学・地球科学系)

セッション 10: モンスーンの経年変化 (その2)

座長: 吉野正敏 (筑波大学・地球科学系)

- 10.1 西部太平洋領域の雲量の経年変化
新田 勳 (気象庁・気象研究所)
- 10.2 GMS による上・下層風ベクトルの変動
元木敏博 (気象庁・気象衛星センター)
- 10.3 西部太平洋領域の対流圏循環の年々変動
丸山健人, 新田 勳 (気象庁・気象研究所), 元木敏博 (気象庁・気象衛星センター)
- 10.4 東アジアでの夏冬モンスーン気圧パターンの変動
山川修治 (筑波大学・地球科学系)
- 10.5 中国東部の夏季モンスーン降雨の ENSO に伴う変動
Fu, Congbin (中国科学院・大気物理研究所)
- 10.6 スリランカの降水の季節変動と南方振動およびエル・ニーニョとの関係
Suppiah, Ramasamy (筑波大学・地球科学系)

会員の広場

筑波の研究者と国家機密法

丸山 健人*

「国家秘密に係わるスパイ行為の防止に関する法律案」(通称国家機密法)は昨年6月に国会に提出され、継続審議となったが、昨年末の国会では審議されないまま廃案になった。もっとも、与党は再提出を公言しているから、予断は許さない。

さて、筑波研究学園都市の国立試験研究機関の研究者たちも、この法案が国会に提出されたことを憂慮していた。ハイテク研究など、軍事技術との区別は困難であり、研究活動そのものが国家機密の対象とされ、研究交流・研究成果の公開ができなくなる。科学技術の平和利

用、国際交流などに重大な悪影響をおよぼす。そこで、有志で反対声明文をつくり、賛同署名をよびかけることにした。声明文ができたのが12月16日、最終日までに国会に持っていくため、わずか3日間しかなかったが、19機関912名の賛同署名が寄せられた。筑波の国立試験研究機関の研究者数は約5,000人だから2割近い数にあたる。賛同署名にはわが気象研究所の64名も含まれている。気象資料が軍事機密にされ、いっさいが戦争に動員されていった気象史の教訓をあらためて思い起こさせた。

12月号編集後記に国家機密法について「なぜか声が上がってきません」とのことでしたので、筑波の気象人は健在であることを誌上にてお知らせしたい。

* Taketo Maruyama, 気象研究所。